

第29回北勢線の魅力を探る 「ぶらくわな 町屋御用水を巡る」

開催日：2017年10月9日（月祝）

参加者：107人（内子ども1人）

協力：善西寺、春日神社、桑名歴史案内人

西別所駅から町屋御用水へ

西別所駅に集合、曇り空で暑くもなく絶好のウォーキング日和。まず町屋川の土手へ上る。江戸時代以前は町屋川はこのあたりから走井山の麓を通過して桑名の町の中へ流れ込んでいたようだ。初代桑名藩主の本多忠勝が町屋川を現在のように付け替えた。これを慶長の町割りと呼んでいる。

堤防の上にコンクリートの矢田用水の揚水機場がある。ポンプで町屋川の水を汲み上げ、農業用水を供給している。少し東へ進むと大きな排水機場がある。さらに東へ進むと左手に林があって門柱や建物の基礎らしきものが残っている。ここは昭和3年（1928）から42年まで使われていた桑名の上水道の水源跡。

下流の方に町屋御用水（以下「御用水」と略す）の取水口がある。堤防にコンクリートの導水路が開かれ、幅1m程の鋼鉄製の門扉が設けられているが、今は端境期なので水門は閉じられていた。ここから御用水の跡を辿る。川成町の空き地の御用水にイギリス積の煉瓦と御影石で作



取水口



親水広場

られた小さな水門が設けられている。寺田商店のところで御用水は矢田用水の水路の下を潜ってそのまま工場の中へ続き、近鉄とJRの線路を潜り新地地内に出ている。道路がないので益生駅横の踏切を回って新地へ行く。新地の御用水は平成16年（2004）に石張り風のコンクリート護岸に整備され、親水広場として水面近くへ降りられるようになっている。御用水は福江町の東海道の本西側を通る狭い道路に沿って流れる。新福橋という石橋が架かっている。福江町から新地を結ぶ橋である。新地を開渠で来た御用水は益世小学校の東から暗渠となって下水道に繋がっているようであるが、昔の水路は細い路地として残っている。

られた小さな水門が設けられている。寺田商店のところで御用水は矢田用水の水路の下を潜ってそのまま工場の中へ続き、近鉄とJRの線路を潜り新地地内に出ている。道路がないので益生駅横の踏切を回って新地へ行く。

新地の御用水は平成16年（2004）に石張り風のコンクリート護岸に整備され、親水広場として水面近くへ降りられるようになっている。



新福橋

善西寺～伝馬公園へ

善西寺を参拝。走井山にあった矢田城の城主矢田氏は織田信長の攻撃で落城し、矢田氏の子孫が寺院を建立した。昭和20年（1945）の空襲によって門と鐘楼以外の建物を焼失したが、昭和23年に本堂、昭和30年に庫裏が再建された。鐘楼



善西寺

の鐘は昭和 39 年(1964)に桑名の鋳物師中川正知の鋳造、喚鐘は昭和 6 年(1936)中川富三が鋳造したもの。国道 1 号線を横断し、東海道に沿った北側の路地へ入り、教覚寺、明円寺の裏手を東へ進むと人家に突き当たる。

この人家の東側は以前は桑名城の外郭堀となっていて江戸時代は町屋御用水がその上を木樋で超えていた。それで今でもこの付近を掛樋と呼んでいる。今は堀は埋め立てられて道路となっている。掛樋で渡った御用水は願證寺という大きなお寺の西側を外郭堀に沿って北へ流れていた。願證寺はもとは長島にあって長島一向一揆の舞台となった寺で、織田信長に攻められたのちに、豊臣秀吉の時代にこの地に桑名願證寺として再興された。寺域 9,900 坪を誇る大きなお寺だったが、江戸時代中期に高田派への改宗について内紛が起こり廃寺となった。現在はその一部が伝馬公園となっている。この公園でトイレ休憩の後、いなべ総合学園元教諭の土井さんから桑名の農業用水についてのミニレクチャーが行われました。



吉津屋御門跡～春日神社～通り井～七里の渡し場跡

今は埋め立てられて細長い連続する公園となっている外郭堀の内側を江戸時代の御用水が流れていた。途中西一色町のあたりで今は公園と道が交差している新橋跡を通り、さらに北へ進むと、江戸時代には吉津屋御門があった。江戸時代の御用水はこの付近から暗渠となって地中に潜り土管や木製の埋樋で城下の道路の下を網の目のように配水されていたようである。



次に桑名の総鎮守である春日神社に到着。ここには神供用の水として使われる井戸があり、御膳水井と言われ、市指定文化財となっている。江戸町の道の真ん中に「井」と書かれた小さな石の標識が埋め込まれている。これは御用水の跡である。御用水は町内の主な道路の地下に筒を埋め、町の随所に正方形の枡を設けて一般の人々が水を汲むようになっており、「通り道に設けられていた井戸」の意味から、これらの井戸は「通り井」と呼ばれた。川口町にも同じ石がある。江戸町の遺構の大きさは約 1 m20 c m 四方の石組、井戸の上端から底まで約 3 m あった。川口町のもは乱形の石を積み上げて正方形の井桁を作り、その上部に長方形の切石を組み合わせたものが残っていたようだ。明治時代の史料には街路の中央に三尺四方、二、三尺の高さがあったと記されている。



最終目的地である「七里の渡し場跡」は江戸時代の東海道七里の渡しの船着き場である。

